平成 30 年７月７日

「時の駅講座」

満蒙開拓の史実から学ぶこと

満蒙開拓平和祈念館
館長　寺沢　秀文　氏

皆さんこんにちは、阿智村にあります満蒙開拓記念館館長の寺沢です。日頃は大勢の方々に記念館に足を運んでいただき、また、沢山のご支援をいただきまして心から御礼を申し上げます。

私自身高森町にはご縁があります。私の両親は満蒙開拓団として大陸へ渡って行っていまして、父親は旧山吹村の下平の出身です。私が生まれ、また今も住んでいる所は現在は松川町増野ですが、生まれた頃は旧山吹村の里見という地区でした。

今日は満蒙開拓についてのお話しをいたします。予めお断りをしておきますが、何回も私の話を聞いていただいている方には同じお話で恐縮ですが、私は学校の先生でも歴史の研究者でもなくて、民間の一経営者です。たまたま私の両親が開拓団に参加していましたので、そんな両親から聞いたり他の開拓者から聞いたこと、また、これまで３０回以上旧満州へ調査に行っていますので、これからお話しすることは聞き取ったこととか、現地調査でわかったことが中心となります。私は研究者ではありませんので内容はアカデミックなものではなくて、歴史に詳しい方、満蒙開拓に詳しい方がおられる前でお話しすることをお許し願いたいと思います。

阿智村の満蒙開拓平和記念館、早いもので平成 25 年の４月に開館してからもう５年の歳月が過ぎようとしています。この間地元の方をはじめ全国各地からこの５年間平均で年 27,000 人位の方が来館され、大変有難いことだと思っています。

一昨年の 11 月には、天皇皇后両陛下が大変強いご希望で足をお運びになられました。その際館内をご案内させていただきました。両陛下は全国どこの博物館、美術館へ行かれましても公平を期すために見学時間は 20 分間と決められているそうで、今回もその 20 分間のなかでご案内をいたしました。

満州（国）と満蒙開拓団（満州開拓団）

1、満州（国）とはどのような場所だったのか？

1932 年（昭和７年）から、終戦の 1945 年（昭和 20 年）までのたった 13 年間、中国の東北地方に存在していた**幻の国**といわれるのが満州です。日本の３倍程の広さです。この満州に全国各地から沢山の開拓団員が渡って行くことになります。

「**満州国**」は独立国ということになっていましたが、実際には日本の侵略による「植民地」的な国でした。「満州国」のスローガンに「五族協和」という言葉がありまして、<u>五つの民族が仲良く相和して理想の国を創る</u>、というのがありました。

日本人がリーダーになることによって国を創るということになっていました。そんなところへ全国から開拓団員が渡って行きました。満州の国旗には五つの色が使われていまして、漢民族、満州族、朝鮮族、蒙古族（モンゴル族）、日本人の民族を表していると言われています。満蒙開拓という言い方をするのは満州の一部に内モンゴル（内蒙古）が含まれているので満蒙といいます。赤い色は日本（大和民族）といわれています。

２、満蒙開拓団（満州開拓団）

・開拓団が旧満州に渡った理由と背景

旧満州へは全国から 27 万人といわれる人達が渡って行きました。なぜこれほど多くの開拓団が行ったのかということですが、大きくは次の二つの理由からといわれています。ひとつめは日本国内からの人減らしということがあります。当時は子沢山でした。

私の父親も山吹村の下平の農家の８人兄弟の三男坊でした。当時は８人、10 人兄弟はざらでしたが、山ばかりで平坦地が少ないですから、分けて貰えるような土地の無い次男、三男坊を中心に満州へ行けば２０町歩という広さの農地が与えられるということで勇んで渡って行ったということがあります。２０町歩といいましてもピンときませんが、東京ドーム４個分です。

当時、世界大恐慌の真っ盛り、農村も疲弊していました。この地域の約８割を占めていました養蚕農家ですが、大恐慌のあおりで生糸（シルク）が大暴落しました。生糸の値段が５分の１まで急落したようです。そんな中で農家の次男坊、三男坊が満州へと出て行ったということも背景でした。

・ソ連や抗日勢力に対する「人間の盾」

もうひとつは、かつて日露戦争というのがありました。日本はかろうじてロシアに勝ち、ロシアが満州という地域に元々持っていた権利権益、特に鉄道の権利（後の満鉄）を手に入れて満州国を創っていきますが、敗れたロシアはその後ソビエト連邦（ソ連）と名前を変え、力を蓄えて日本に取られた満州を奪い返そうと狙っています。

満州を奪い返されますと朝鮮半島を渡って日本本土も危ない、ということで満州を防衛するということは国家にとって一大事であるということで、満州は日本の生命線といわれていました。そこで満州には日本軍（関東軍）が展開していきますが、広大な満州を関東軍だけではカバーしきれないということで、民間人主体の開拓団をこの満州に置くことによって満州の防衛の一端を開拓団に担わせようとしたのが開拓団のもうひとつの目的であったといわれています。

開拓団の初期の頃は武装移民といいまして、元軍役の経験のある方達を中心に４年目迄送りましたが、５年目以降は民間人主体の一般開拓団となりました。

結果、**ソ連に対する人間の盾**として送り込まれていったのがもう一つの満蒙開拓の姿だといわれています。

３、長野県の開拓団

日本全国から約２７万人が満州へと渡って行きます。その中で一番多くの開拓団を出したのは長野県です。二番目の山形県の２倍以上に当たる３万７千人以上を出しています。二番目の山形県が１万７千人ですから圧倒的に多い数です。そして長野県の中でも一番多いのが飯田、下伊那です。

昭和２０年８月９日時点の長野県の在満開拓団員は約３万３千人ですが、この８月９日というのはソ連軍が満州へ攻め込んできた日です。飯田、下伊那からは約８千４百人ですから長野県からの約４分の１を出しています。ということは全国で一番多くの開拓団を出したのが飯田、下伊那ということです。

・長野県が何故多かったのか

先程お話ししましたように山が多く平坦地が少ない、という地形的なことがあります。

しかしそれは長野県だけではなくて他の地方県も同じことです。
　ではなぜ？　それはこの当時の長野県の地域のリーダーの中に満蒙開拓推進論者が多かったということがあります。この高森町からも多くの開拓団が出ていますが、その背景には松島親造さんという旧満州の官僚がいまして、そういう人々が先に立って送り込んでいきますが、長野県の行政界、教育界に満蒙開拓推進論者が多かったということが一番大きな理由だとされています。

・「教員赤化事件」というのがありました。
　戦前ですから共産党が摘発対象になっていた時期がありまして、共産党員とされた学校の先生達が沢山逮捕されてしまったという事件がありました。沢山の先生達が逮捕されてしまったという不名誉を挽回するために、長野県の教育界は国策である満蒙開拓の事業に協力することによって汚名の挽回を図った、という見方をする研究者もいます。そして長野県という勤勉な県民性もあるかと思います。

４、飯田・下伊那の開拓団

・高森町からの開拓団
　さて高森町のおはなしを中心にしていきます。資料には高森町からは旧山吹村から 58 人、旧市田村から 219 人、合計 277 人が開拓団として渡って行ったとなっています。旧神稲村や喬木村からも多く、長野県は全ての村から開拓団員が出ました。
　開拓団には大きく分けて二種類ありまして家族等と共に行く一般の開拓団と、14 歳から 17 歳の青少年で組織する**「満蒙開拓青少年義勇軍」**というのがありました。
　戦後の未帰還率（生きて帰れなかった人、現地に残された人）をみてみます。0 才から 12 才の未帰還率が 52%、13 才から 45 歳の壮年年齢が 32 パーセントということで、幼い子供たちの半分以上が現地で亡くなっているといういかに弱い者が犠牲になったのかということがわかります。

・「松島自由移民開拓団」
　高森町からも多くの人々が渡っていきましたが、一番多いのが『水曲柳開拓団』です。『水曲柳開拓団』というのは〔松島自由移民開拓団〕の一つです。〔自由移民開拓団〕といいますと自分から手を挙げて行く意志を示したように思われますが、実際に募集したのは下伊那町村会です。従って行政が先に立って結成したのが〔松島自由移民開拓団〕ですが、なぜ「松島」かといいますと、旧市田村下市田出身の松島親造さんという方で満州国吉林総領事館朝鮮課長という役人がいました。
　この人が日本に帰るたびに、是非満州へ開拓民を送れ、ということを説いて回ります。
　松島さんは働き盛りの年齢でしたから、地域の中でも同年輩の方々が行政、教育界のトップにいたということから、この高森町からも４団あった〔松島自由開拓団〕の中でも一番大きかった水曲柳開拓団という所へ行きました。高森町から大勢行ったのは松島親造さんの存在が大きかったというわけです。

・人間の防波堤
　資料の地図を見ていただきます。黒い点で示してあるのが日本から開拓団が行った場所です。

満州の北の方、ソ満国境近くにかなり沢山の開拓団のあることがわかります。これは何を意味するのかと申しますと、先ほどお話ししたように開拓団が北のソ連に対する人間の防波堤として置かれているのが地図から見ても明らかです。しかも後から行った開拓団ほど北の方の危険な方面へ送り込まれています。

『**望郷の鐘**』という映画の中で内藤　剛さんが演じられた《山本慈昭さん》というお坊さんがおられまして、この方は満州に残された沢山の残留孤児を日本へ返すため尽力された**「残留孤児の父」**といわれる方です。記念館近くの長岳寺の住職でした。この方を主人公にしたのが『望郷の鐘』という映画です。この方は阿智村の方達が行った「阿智郷開拓団」の現地での学校の先生として渡って行かれました。山本慈昭さん達が行かれた場所というのは、ソ連との国境に近いソ満国境という大変危険な所です。近くには南信濃郷といって根羽、平谷、清内路から行った開拓団があります。下水内郷、更科郷、埴科郷といった長野県からの開拓団がこのあたり宝清県という所へ沢山入りました。その中でも一番端の阿智郷開拓団が入ったのは昭和２０年の５月のことです。　終戦からわずか４ヶ月前にこんな危険な場所へ送られました。

・疎開開拓団

一番最後に日本から行った開拓団は東京からですが、この開拓団が福井県の敦賀港を出港したのは昭和２０年８月２日のことでした。終戦のわずか２週間前です。そして約一週間をかけて牡丹江へ着いたのが８月９日のことです。ソ連軍が満州へ攻め込んできたその日です。ですからその開拓団は自分達の開拓地へたどり着くことができず、そのまま逃避行に追い込まれてしまいます。

なぜ、そんな敗戦間際に東京から開拓団が送り込まれていったのか。当時、東京は大空襲を受け、長野県などの地方へ疎開をしていました。そして満州へ疎開しましょうといって集められた「疎開開拓団」というのがいくつもありました。その中の一つが満州へ渡り、非常に悲惨な結果となってしまいましたが、当時、満州は危険な場所だということが国民に知らされずにいなかった、そのために終戦直前に危険な満州に渡ってしまったということに驚きを感じます。

・満蒙開拓青少年義勇隊

もうひとつ、開拓団には**「満蒙開拓青少年義勇軍」**といいましてこの高森町からも沢山の人が参加していますが、１４歳から１８歳の少年達が青少年義勇軍として渡っています。全国２７万人の開拓団のうち、約３０％がこの青少年達です。なぜこんな少年達が参加したのか。

国は国策として沢山の人を満州へ送り込もうとして、大勢の開拓民を募集しましたが、次第に募集しても集まりが悪くなってきます。

しかし国策ですから、多くの人を送り込まなければならない。そこで白羽の矢が立ったのがこういった１４歳から１８歳の少年達でした。

当然学校年齢でしたので、学校の先生達が子供達を送り出しました。ポスターを貼り、県からの指示で生徒の村別割当表も作られました。こうした状況の中で先生たちも一生懸命にならざるをえなかったそうです。

記念館では“語り部”といいまして、元開拓団員や元青少年義勇軍の体験者の方におは

なしを聞く会があります。ある元青少年義勇軍の方は貧しい農家の次男か三男でしたが、学校で先生から「お前、青少年義勇軍として満州へ行け！」といわれて三日間、校長室に立たされ続けてやむなく満州へ行った、ということを証言された方もいました。

素朴な少年たちもこんな風に満州へ渡って行ったということも知っていただきたい事実です。

５、終戦と逃避行、そして残留孤児

山吹村下平で生まれた私の父親は、昭和１６年、満州から帰国した松島親造先生の講演会を聞き、その話に大変感銘を受けて、今の言葉でいえば陶酔をしまして、自分も満州へ行くんだということで行きました。尊敬する松島先生の吉林市の自宅に冬の間住み込み、農協みたいなところで働いたというくらい松島先生に心酔したそうです。

開拓団は応募すると選抜試験があったそうです。選抜試験の会場となった下伊那農業高校の初代校長に芝原彦十先生という方がいますが、芝原先生のご自宅が面接会場だったそうです。そこで４０名位で面接を受けて、全員パスし満州へ行くことになります。

こうした形で当時の教育会もバックアップしていたと思います。そして父親は満州の水曲柳開拓団へ入ります。一般開拓団ですので、ここはご老人から小さな子供達まで一緒に満州へ行きました。

私の母親は当時の神稲村壬生沢の出身です。最初は独身で渡った父親も、生活が安定した２年後位に日本へ帰りまして、「家族招致」という嫁取り、所謂婚活に入り、お見合いをして結婚、翌年、昭和１９年４月に母親も**「大陸の花嫁」**として渡って行きます。二人が初めて顔を合わせたのは結婚式の一週間前だったそうですが、こうして母親も沢山の人達と共に「大陸の花嫁」となりました。

・１枚の写真

現地で撮られた一枚の写真があります。写っているのは私の兄ですが、１歳位で亡くなりました。兄が生まれたころが一番幸せだったと生前両親は言っていました。

写真は昭和２０年の５月頃撮ったものですが、当然カメラなどは誰も持っていませんから、一番近い町まで牛車に揺られ、町に有った写真館で撮った唯一の家族写真です。写真を撮ったということは聞いていましたが、父親は現地で軍隊にとられまして、たった１枚のこの家族写真を持って出征したそうですが、終戦間際、ソ連が攻め込んできた時に「身元の分かるものは一切焼き捨てろ」といわれて、泣く泣く処分したそうです。

２年前母親が他界したとき叔母の家から「こんなものがあったよ」と手渡されたのがこの写真です。満州が平和だった頃、日本の親戚に宛てた１枚の写真が７０年ぶりに出てきたわけです。できれば生前の父親、母親に見せてあげたかったと思いますが、こんな平穏な生活があったんだなあと思う１枚です。

６、加害と被害

・満州へ行ってみたら

私達は毎年のように現地調査へ行っていますが、昨年、水曲柳へ行きました。黒竜江省の広い大地に芽が出たばかりのトウモロコシ畑がありました。開拓団が入った場所です。

父親が初めて行った時、満蒙「開拓」ですので現地の山林原野を切り開いて農地を作る

のかなあと思ったら、そこにはもう畑も家もありました。それは何を意味するのか。
実は満蒙「開拓」といいますが、多くは元々そこに住んでいた中国の方々の家や土地を非常に安い値段で買い上げて、そこにいた人々を他の地域に出したりして、そこに開拓団が入っていきました。
元々そこに住んでいた人々の物だと聞いた父親は「それはまずいな」と思ったそうですが、山吹の駅頭で万歳！万歳！と送られて１週間をかけて出てきた、今更帰るわけにはいかない、現地の人々と仲良くやっていくしかないかなと思ったそうですが、そういった形で多くの開拓団は入っていったそうです。中には実際に原野を開拓した開拓団もありました。追い出された中国人達は山へ入って開墾したり、村へ残った人達は日本人の使用人となったということです。

・ソ連侵攻、日本人襲撃

当然中国人は日本人のことを恨んでいたといわれています。終戦の１週間前に開拓の村を襲ってきたのはソ連軍だけではありません。それよりもっと多くの現地の中国人達が開拓団に襲い掛かってきています。語り部の方達はその時のことを「匪族が襲ってきた」という言い方をされますが、いくら満州でも盗賊や山賊ばかりではなくて、襲ってきた多くは日頃から日本人のことを恨んでいた一般の中国人でした。
ですから私達の記念館では当時の日本人開拓団の人々の想いやあこがれ、夢、苦難、涙、そういうものも語り継ぎますが、同時に現地の人達に対するこうした加害の面もあったということ、満蒙開拓の加害と被害の両面にしっかりと向き合って、そのことから未来に向けて平和をきちんと学んでいく、ということが記念館の大事な使命だと考えています。満蒙開拓にはそういった面もあったということをお話ししました。

・現地訪問

次に水曲柳にあった開拓団が住んでいた家の写真を見ていただきます。１０年程前に行ったときは中国人の人が住んでいまして、その後行った時は残念ながら壊されていました。
次の写真はある満州の元開拓地です。一昨年訪問した場所ですが何も無い所です。誰も住んでいません。これは山本慈昭さん達、阿智郷開拓団が入っていた場所です。ここには数か月しかいなかったため、何も残っていません。この場所へ飯田下伊那から公式の訪中団が行ったのは戦後７０年経って初めてのことでした。初めてここを訪れた方々、どんな思いをもって立っておられたか、手を合わることが精一杯でした。
この訪中の時、大変驚いたことがありました。この地を訪れる計画をしたとき、何ももう無いことがわかっている場所でしたが、もし歴史に詳しい方がいらしたら開拓団が入った場所を調べておいていただきたい、という希望を伝えておきましたところ、現地の中国人の歴史の李徳龍先生が事前調査、下見をしてくださり、何も無い地へ案内していただくことができました。
最初の晩、李先生と夕食を共に囲みました。その時、李先生がポツリ「私のおじいさんは１９４５年（昭和２０年）８月１５日、逃避行をしていく開拓団の日本人によって殺されました。」とおっしゃいました。驚いて声も出ませんでした。
逃避行をしていく中で色々なことがありまして、現地の人々に対する加害行動があったということは聞いてはいましたが、実際に日本人によって殺された、という生の声を聴い

たのは初めてだったものですから、一人の日本人として本当に申し訳ないことをしましたと申し上げることが精一杯でした。その時、李先生がおっしゃったのは「私達中国人は日本人がしたことを忘れることは決して無い。しかし、あなた方はこうして歴史を忘れないために、且つ、何があったかを知るためにこうしてここまで足を運んできてくれている、その気持ちがとてもよくわかるのでご協力したいと思います。」と言って李先生は私達が現地にいる４日間ずっと同行してくださいました。

改めて満蒙開拓の被害と加害という面があったこと、そしてこうした民間交流の中で実際に顔を合わせて話すことが、これからの友好でとても大切だということをこの訪中で最も感じたことです。

７．終戦と逃避行、そして残留孤児

・ソ連の侵攻

昭和２０年８月９日、満州国へソ連軍が攻め込んできました。当時、ソ連と日本は不可侵条約、戦争はしないという中立条約を結んでいたのですが、ソ連にはそういう考えがなかったようで、昭和２０年２月ヤルタ会談という会談が行われますが、ソ連はヨーロッパ戦線でヒトラーのドイツと戦っていましたから、それが終わったら満州へ攻め込むという約束（密約）をアメリカ、イギリスとしています。そしてその約束通り、昭和２０年８月９日の３日前に広島に原爆が落とされます。そして日本の負けが確定した段階で一説によればソ連は予定を早めて、８月９日満州へと攻め込みました。

・根こそぎ動員

その日開拓地ではどうだったかといいますと、その頃開拓地では若い男性はいませんでした。かつて世界最強といわれていた日本軍（関東軍）でしたが、戦争が不利になりますとその主力部隊が沖縄やフィリピンなど南方戦線、あるいは内地の防衛にと出て行ってしまいます。そこでいよいよ当初の予定通り開拓団から若い男性達を集めていきます。

開拓団へ行った男性達は徴兵しないということがいわれてきたようですが、そんなことがあるはずもなく、そこに開拓団がいるということは、ソ連に対する人間の盾ということもありますが、現地で活動をしていた関東軍のための食料、軍馬、そして最後には兵士の供給基地とすることがもうひとつの大きな目的であったといわれていますから、いよいよ開拓団からも兵士を集めていきます。

開拓団にいた１８歳から４５歳までの男性全てに、赤紙という召集令状が届きます（根こぞぎ動員）。私の父親にも赤紙がきました。昭和２０年７月３１日のことです。敗戦の２週間前に赤紙がきて、その２日後には入隊します。入隊しましたが軍隊は弱体化していますので、持たせてもらえる武器等は何も無く、やらされていたのは塹壕堀、爆弾を抱いて戦車の下に突っ込む訓練、そんなことばかりだったそうです。そうして１週間後、ソ連軍が攻めてきて父親達は全てソ連軍の捕虜となり、そのまま平均で３年間位のシベリア抑留生活となりました。

そんなわけで開拓団には若い男性の姿はありませんでした。残っていたのは女性、子供、老人ばかりです。そこに強力なソ連軍が襲いかかり、そして日頃から恨みに思っていた中国の人々が襲い掛かります。

・関東軍の作戦

では、その時開拓団を守るべき日本の関東軍はどうしていたかというと、残念ながら前線には日本軍の姿はありませんでした。関東軍の作戦図を見てみますと、強力なソ連軍が攻めてきたら関東軍はとても守りきれないので、朝鮮半島寄りの作戦地域というところまで下がって敵を迎え撃つ、其の他の地域は**放棄地域**と書いてあり、殆どの開拓団はこの放棄地域に入っています。

戦略上とはいいながらも、関東軍は南の地域に下がって行ってしまいます。南に下がる時は敵に知られるから、ということで開拓団には一切知らされません。知らさないどころか、敵の追撃を防ぐために大きな川にかかる橋、鉄道を爆破して下がって行ってしまいます。

・悲惨な逃避行

守るべき軍隊はいなくなり、若い男性もいない。女性、子供、老人ばかりの開拓団は沢山の犠牲者を出すことになります。当時の日本は**『生きて虜囚の辱めを受けず』**という教育でした。捕虜になるのは恥という教育でしたから、「敵の手にかかるくらいなら自分達で」ということで集団自決が起きています。小さな子供達には青酸カリを配ったり、円陣を組んで真ん中で手榴弾を爆発させたりして、沢山の集団自決が行われました。勿論、中には「こんな所で死んではならない、生きて日本に帰るんだ」といった開拓団も沢山います。　そういった開拓団も昼間は山の中に隠れてやり過ごし、夜になって移動しますが、その時に小さな子供や赤ちゃんが泣きます。そうすると「敵に見つかるから殺せ！」といわれます。やむなく手にかけたり、そんなことは出来ないと山の中に置いてきたり、或いは現地の中国人に預けたりして、そんな中から大勢の残留孤児や残留婦人が生まれます。そのような大きな犠牲を出しながら満蒙開拓と、満州という国はたった１３年間でその歴史を終えます。

・終戦、政府の方針

戦争は終わりましたが多くの日本人達は帰国することができませんでした。現地に残された日本人は約 170 万人といわれています。何故、日本に帰ることができなかったのか。

当時の日本政府の方針というのは、「外地にいる日本人は現地にとどまり、そこで生き延びよ」ということでした。

日本がポツダム宣言を受諾し、日本の敗戦が決まります。昭和 20 年８月 14 日に日本外務省が外地にいる日本人に出した文章を読んでみます。

「居留民（外地に住んでいる日本人）は出来得る限り定着の方針を執る」つまり現地にとどまれということです。

二番目の文章は同じく昭和 20 年８月 26 日に日本大本営から出されました。

「満鮮に土着するものは（満州や朝鮮半島に住もうとする日本人は）日本国籍を離るるも支障なきものとす」

つまり、日本国籍を捨てても良いから現地にとどまって生き延びよ、ということです。開拓民として渡って行った方がおっしゃるには「私達は国策によって移民として行ったの

に、最後にはこうして国によって棄民として捨てられてしまった」ということです。
　日本政府のこうした方針により、結果として多くの日本人が現地に残され、厳しい冬を避難民収容所で過ごすことになります。そこで多くの方が亡くなられました。
　戦争で亡くなった方よりも、終戦の年の冬を越せずに亡くなった方の方が圧倒的に多いです。
　私の兄も収容所での冬を越せずに、僅か１歳で亡くなっています。奉天という街で収容所に辿りついてきた日本人の孤児を写した写真を見ていただきます。６ 歳か７歳だと思います。胸に抱えているのはお母さんの遺骨だそうです。お気付きでしょうか、この子は女の子です。満州ではいたずらから避けるため女性は頭を坊主狩りにし、顔には煤を塗ったりして、男性に化けて難を逃れようとしていたそうです。
　満州という国が本当に理想の国だったとすれば、何故こんな悲しいことになってしまったのか。６ 歳、７ 歳の女の子がこんな男装をして、お母さんの遺骨を抱きながら逃げ惑わなければならなかったのか、このようなことが二度とあってはならないと改めて思わせる写真ですが、この写真は記念館に展示をしてありません。何故かと申しますと、この時の女の子は後に生きていることが分かりました。記念館でこの写真を使おうと思いましたが、ご家族の方から、あまりにも痛々しい写真なので使うことは控えて欲しい、と言われまして、記念館では展示してありませんが、このような日本人残留孤児が沢山いたことも満州の本当の姿です。

８、引揚と戦後開拓

・引き揚げ

　私の母親を含め大半の日本人がようやく日本に帰ることが出来たのは終戦の翌年、昭和21 年５月からのことです。
　皆さん、今年の３月に NHK で放送された『どこにも無い国』という番組をご覧になった方いらっしゃいますか？
　満州に住んでいた３人の日本人が終戦の冬、沢山の人が満州で亡くなっていくのを見て何とかしなければと満州を脱出、日本に潜入して行った場所が東京の GHQ（占領軍）です。　そこでマッカーサー総司令官に直訴します。その時のリーダー丸山邦雄さんという方は飯山市の出身で、アメリカに長く留学されていまして英語が堪能でした。マッカーサーに実情を強く訴えることでようやく満州からの引き上げが実現しました。丸山さんの御子息であるポール・丸山さんが父親達の活動を本に書かれ、これを原作としてこのドラマが出来ましたが、このポール・丸山さんが今年の９月に飯田へ来られますので、是非講演会へ来ていただけたらと思います。

・戦後開拓

　私の母親も引揚げ船でようやく帰って来ることが出来ました。しかし、引揚者たちには日本に帰って来てからも再び困難が待ち受けています。といいますのは、満州へ渡った方達は元々日本で分けて貰う場所が無く満州へ渡ったわけですから、帰国出来ても行き場所がありません。　そうした人達はどうしたかといいますと、故郷から離れた人も多いですし、増野もそうですが山の中へ入って、「今度こそ本当の開拓をするぞ」ということになります。

富士山麓も外地や満州から帰ってきた人達が入植した場所です。かつては上九一色村といいまして、オウム真理教のサティアンのあったあの場所こそは満州などから引き揚げた人達が入植した戦後の開拓地です。

富士山の火山灰地の荒地で、耕作に向く土地ではありませんが、戦後そこが解放されて入植したのです。荒地だったためそこに目をつけてサティアンが出来たと思いますが、当時サティアンの建設に反対をしていた多くの人々は満州から帰ってきた方々が大半を占めています。多くは長野県出身の方々です。そんな荒地で戦後の開拓者の生活が始まっていきます。

戦後、外地からは約 660 万人という復員軍人、引揚者が帰ってきました。そういった人達を受け入れるために政府は昭和 20 年 11 月に〔緊急開拓事業〕としまして全国各地に新しい開拓地を作るよう指示を出します。

元々開墾する場所も無くて満州へ行ったのですから、戦後開拓しようとしても今まで手を付けなかった辺鄙な山間地しかありません。

・下伊那地区の開拓地

長野県内では約２００ケ所の戦後開拓地が造られました。下伊那でも２０ケ所位造られました。その中のひとつが増野原で、４０戸が入植しました。現在、増野原は松川町と高森町に分かれていますが、松川町の増野原が第１次の開拓といいまして３０戸、高森町山吹の増野が第２次の開拓で１０戸、合わせて４０戸の開拓が入りました。

しかし、どこの戦後開拓地も生活環境は厳しくて、平成元年、戦後４０年の時の統計を見ますと約半分が農業をやめて、開拓地から離れていってしまっています。

豊丘の大満沢という所には１０戸入りましたが、離農率１００％で廃村になってしまいました。他にもそのような村がいくつかありまして、開拓の村の環境は大変厳しかったようです。

・高森町の開拓地

それに対して、増野原は離農率が１割以下です。９割以上という高い定着率をみせたのが増野の開拓です。　当初は山だった増野も今は立派な果樹園地となっています。開拓記念碑もありまして、二次の碑、ここには第二次の開拓で入った１０戸の方々のお名前が刻まれています。私の母親の話で恐縮ですが、母親もようやく日本に帰って来ることが出来ましたが、長男も亡くし、夫もどうしているか全くわからない状態でした。父親はシベリアに抑留されていましたが、それがわかった段階で募集の始まっていた増野原の開拓に入ることを決意します。藁葺きの家に清水を引いて住んでいました。やがて父親も戦後シベリアから帰ってきまして入植、皆さんの力で一緒にやってきました。

私が小さい頃から父親から聞かされてきた話があります。父親は９１才で亡くなるまで“語り部”として自分の体験談を語っていました。その父親が満州からシベリアへ移されてようやく帰国して増野へ入り、今度こそ本当の開拓をしてみて改めて思ったのは当時自分達の大切な家や農地を奪われた中国人の農民たちのくやしさや悲しさがよくわかった、ということ、そして中国人の方々には本当に申し訳ないことをしたということを私が子供の頃からよく話してくれました。

私が今、記念館で活動しているのも父親のこの言葉が原点であると思っています。

９、満蒙開拓の歴史から学ぶこと

・旧満州の「方正日本人公墓」

次に満州で唯一許されている日本人の公墓の写真を見ていただきます。多くの日本人が亡くなった旧満州ですが中国側から許されている日本人のお墓はこの一ヶ所だけです。私達は毎年墓参に参りますが、中に入れない時もあります。10 年程前ですが、この公墓の横に建てられた新しい碑に反日活動家の青年たちが赤ペンキをかけたりする行動がありまして、以降、なかなか入ることが難しいし、入らせてもらっても写真はダメ、一昨年もお線香、お花もダメでした。墓地公園の玄関は厳重に閉じられています。

・中国人養父母の恩義

そして墓地公園の中にもう一つのお墓があります。これは『中国人養父母の墓』といいまして、沢山の日本人残留孤児がどうにか生き延びて日本に帰ることが出来たのは、残留孤児を拾って育ててくれた中国人養父母の皆さんのおかげです。その方々のお墓です。その方々のことを私達日本人として忘れてはいけないと思います。

私達は毎年訪中して調査を行いますが、その聞き取りをした養母の一人に李淑蘭さんという方がいまして、日本人の女の子の孤児を拾って育ててくれた方です。皆さん高齢化をしています。この方は一昨年、記念館と日中友好協会によって記念館へお招きしました。李淑蘭さんは終戦直後の９月頃に痩せ衰えた日本人の子供を引き取ってくれたそうです。その時に周りの中国人の人達から「お前は侵略者である日本人の子供を育てるのか！」といって反対をされたそうです。しかし李淑蘭さんは「私がこの子を引き取らなかったら誰がこの子の命を救うのか」といって引き取り、りっぱに育て上げ日本へ帰してくれました。そういう中国の養父母がいたということを日本人としてもっと知っておかなければいけないし、もっときちんとすべきだと思います。こうした方々に対することは国や政府がきちんとして欲しいと思います。しかし、国が何もしてくれないからと放っておいたら皆さんどんどん歳を取って亡くなっていってしまいます。私達の出来ることを自分達でやっていくこと、それが記念館の役割だと思っています。

・満蒙開拓平和祈念館

沢山の犠牲者を出した満蒙開拓。満蒙開拓に特化した記念館は平成２５年の４月に開館するまでは全国どこにもありませんでした。あれだけ多くの犠牲者を出した満蒙開拓に特化した記念館がなぜ一つも無かったのか。一番大きな理由はやはり「不都合な歴史」であった、ということだと思います。

・不都合な史実に目をつむらない

開拓民を送り出した側からすれば、満蒙開拓という名前で現地へ行けば豊かな生活が待っている、ということで送り出した。しかしそこに有ったのは家も畑も用意されていて、実はそれは現地の中国人の物であり、中国人達は日本人のことを恨んでいるということを教えられていたなら、あんなにも沢山の開拓団員が渡って行かなかったでしょうし、多くの犠牲者が出ることもなかったと思います。

満州国防の一端を民間人に担わすために、民間人主体の開拓民を送り出し多くの犠牲を出してしまった。そして最後にはああいった形で置き去りにした。そういったことを振り

返ることを良しとしない送り出した側の理由もあるでしょうし、もうひとつ、送り出された皆さんにとってもお国の為、あるいは安定した生活の為にと満州へ渡りますが、戦争が終わって振り返ってみれば侵略に加担していた、ということに気が付くわけです。悲惨な集団自決ということなども振り返りたくないという中で、あまり語られることがなかったのが満蒙開拓の歴史でした。

しかし、不都合な事実に目をつむることは、再び同じ過ちを繰り返すことになるのが歴史ですから、不都合な歴史であってもきちんと向き合って、その中から未来の平和に向けて学んでいくことが私達満蒙開拓記念館に課せられた大きなテーマだと思います。

記念館には大勢の方にお越しいただいていまして、語り部の会など沢山さんの活動が展開されています。

・前事不忘、後事之師

私達記念館が大切にしている言葉があります。**『前事不忘、後事之師』**―前事を忘れず、後事の教訓とする―　過去の事を忘れずに未来に向けての教訓とする、これは日中国交回復の時に周恩来さんが引用した中国の故事です。大切にしていきたい言葉です。満蒙開拓の歴史から私達は何を学んでいけばよいのか、学ばなければならないのか。

・「満蒙開拓」送出に反対した村長

当時、全国各地から満蒙開拓のために各地区の町村長さんたちが現地へと視察に行っています。そして日本に帰ってきてから報告会を開いて、「満州は良い所だから是非満蒙開拓に行きましょう」と誘います。

その中に一人、村から開拓団を出すことを最後まで反対された方がいます。現在の阿南町、当時の大下条村の村長だった佐々木忠綱さんです。自分で視察に行ってきた結果、「あそこは日本人の行く場所ではない」と言って大下条村からは公式には開拓団を出していません。

貧しい村でしたからどうしても開拓団へ行きたいという方もおられまして、個人的に隣の泰阜村などの開拓団へ入った方もいます。大下条村からは分村とか分郷といった形では一切出していません。しかし、当時のことですから国策に従わない非国民、或いは国賊と言われて村の内外から責められたそうです。しかし、佐々木村長は最後まで公式な開拓団を村から出さなかった。

結果として戦争が終わってみれば大下条村からの犠牲者は少なくて済んだのですから、大変評価が上がりますが、たとえ国策であっても「おかしいものはおかしい」といって抗った方がいたということ、りっぱな国策もある中で満蒙開拓のような結果として残念ながら大きな犠牲を出した国策もあったのですから、「それは違う」といえる感性を持った賢い国民であるためには、こうした過去の歴史の中から失敗をきちんと学ぶことが必要だと思います。こうしたことを是非若い方達に知ってもらいたいと思っています。

・あるアジアの青年の言葉

地元の中学生や、修学旅行の学生たちが平和学習で来てくれますが、若い人達に何故この歴史を伝えていきたいか、かつてある交流会の場で話しをしたアジアの青年から聞いた言葉が私の心に残っています。

「やはり日本人は信用出来ない。それはなぜかと言えば自分達の国をかつて日本人が侵略したからではなくて、今の日本人がかつて日本が何をしたかということを知ろうとしないから」

と言われた言葉は胸に突き刺さりました。

・歴史に学ぶ

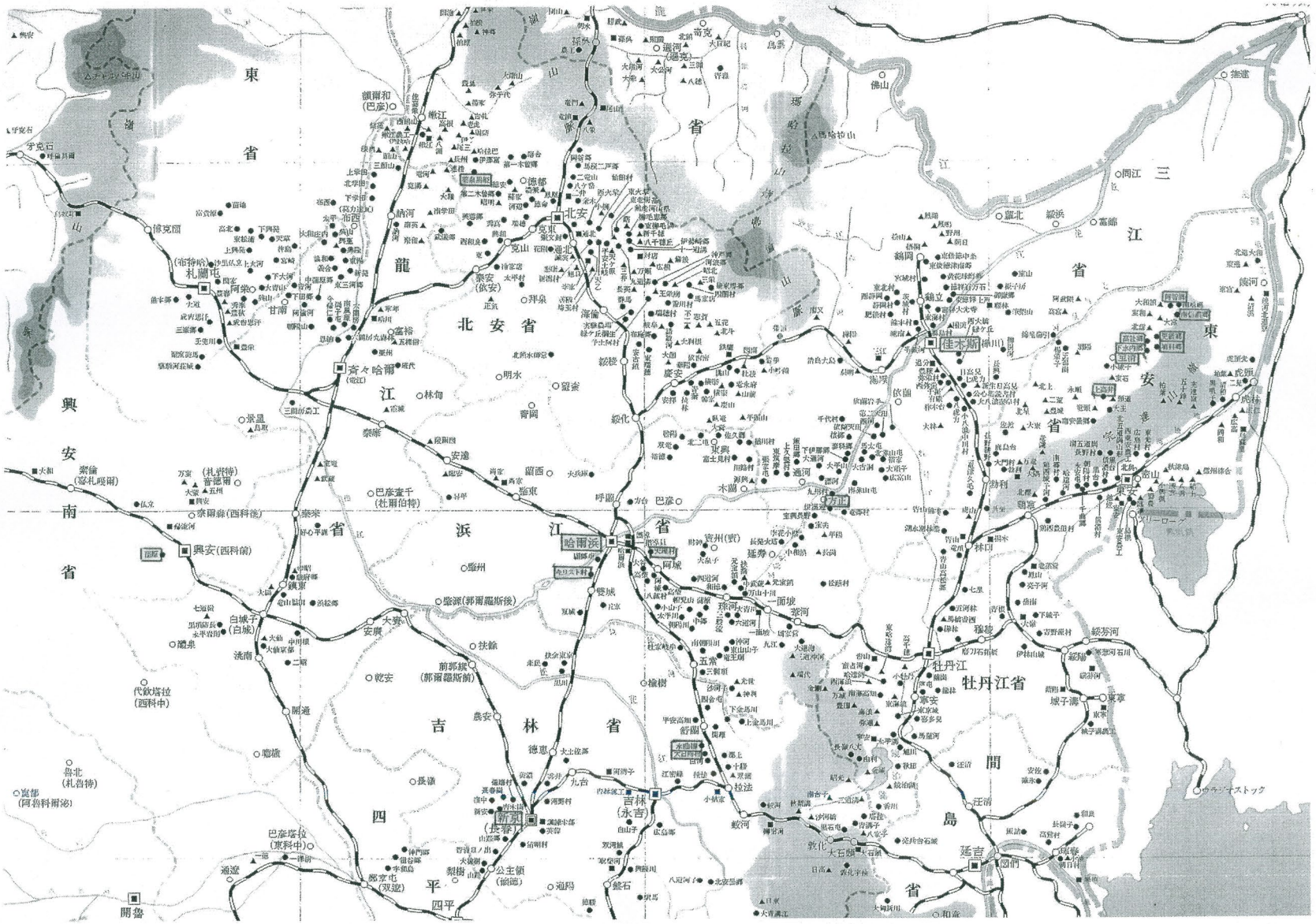
私達は日本人としてこの国を大切にしていかなければいけない。若い人達にもこの国の良さ、美しさを知ってもらうと共に、この国が１００年、１５０年という時の中でアジアの中でどのように過ごしてきたのか、ということをしっかりと教えてあげなければ、子供たちがこれから世界へ出て行った時、いろんな所で軋轢が起きてしまうかもわかりません。そのためにも歴史はしっかり学んでいただきたい。こうしたことを満蒙開拓記念館という場所できちんと発信をしていければと思っています。満蒙記念館には沢山の方がお越ししいただいていますが、なんとも手狭になってきました。修学旅行生が来られても館内に入りきれず、外で歓迎挨拶をしています。せっかく学ぼうと来て下さる皆さんのために、より良い環境を作りたいということで、この夏から記念館の増築計画にとりかかることになりました。

なんとかセミナー棟を建てたいと思っています。民間運営で多くのボランティアに支えられての活動ですので財政的には決して豊かではありません。しかし全国で唯一のこの満蒙開拓記念館からこのような歴史があったということを全国へ向けて発信してまいりたいと思っています。

祈っているだけでは平和は守られない、行動していくことが重要だと考えます。写真で見るような悲しい子供達が生まれるようなことがあってはならない、あどけない少年達を戦争の最前線に送り出すような時代や国に二度としないことを私達は過去の教訓の中から学ばなければなりません。

事実を知った者の社会的責任、それは次の人に伝えていくことです。今日お聴きになった話の一端を周りの方、地域の方に広めていただいたら有難いなあと思います。これで私のお話を終わらせていただきます。

満蒙開拓の史実に学ぶこと


興安南省
東省
北安省
龍江省
吉林省
四平
牡丹江省
間島
東安省
三江省
浜江省
ハルビン
佳木斯
牡丹江
延吉
吉林(永吉)
新京(長春)
四平
ウラジオストック